

団 体 名	NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト
事 業 名	海と湿原のつながり調査プロジェクト

特定非営利活動法人霧多布湿原ナショナルトラストでは、2016年北海道 e-水プロジェクト助成金を受けて、「海と湿原のつながり調査プロジェクト」を実施しました。本プロジェクトは、森から湿原を経て海へといたる流域の「つながり」を明らかにし、浜中町の豊かな海産物に付加価値をつけることで、漁業を中心とした経済活動と流域の環境保全が両立する町づくりを目指して、2012年より調査を続けてきました。2016年はまとめの年として、1) 環境教育プログラムとして機能するモニタリング活動「アマモウォッチ」の実施 2) つながりフォーラムを開催しました。

2016年のアマモウォッチは6月に実施し、浜中町立霧多布高校の生徒9名が参加しました。事前にアマモ場に関するレクチャーを行い、当日はカヌーで現地に上陸して調査を行いました。調査の結果、2016年はおよそ5～20%被度のアマモ場が広がっており、2015年とほぼ変わらないレベルで繁茂していることがわかりました。高校生からは「アマモがあることは知っていたけれど、こんなにいろんな役割があることは知らなかった」「興味がわいた」などの声が聞かれました。



10月11日には、これまでの調査内容を町民にお知らせし、今後の展望について議論する場として、「海と湿原のつながりフォーラム」を開催しました。野外調査にご協力いただいた北海道立総合研究機構林業試験場の長坂晶子氏と、北海道大学地球環境科学院の巴シン氏にこれまでの調査内容についてご報告いただいたほか、総合地球環境科学研究所の石川智士氏、国立研究開発法人水産研究教育機構瀬戸内海区水産研究所の堀正和氏にご講演をいただきました。フォーラムでは、地域住民の自然保護への意識付けには、自然体験だけではなく「なぜ」「どのように」守るかを明確にする必要性や、自然環境の「つながり」だけでなく、産業間の「つながり」を意識し、様々なステークホルダーが同じテーブルについて流域保全に取り組むことの重要性が指摘されました。



環境保全を考える上で、モニタリングは「どのような環境であるか」を知る第一歩であり、管理保全の手法が有効であるかを確かめるための最後の一步でもあります。このようなモニタリング活動を、地元の高校生とともに継続的に行っている見通しが立ったことは大きな成果です。一方で、フォーラムの参加者が限定的であるなど、地域住民の意識喚起の難しさが改めて浮き彫りとなりました。今後は、フォーラムでも指摘されたように、流域にかかわるすべての関係者が同じテーブルについて議論ができるような場を作ることが必要であると考えられます。

特定非営利活動法人霧多布湿原ナショナルトラスト